

# ロンドン五輪、 5選手（現役学生3選手 学員2選手）に熱い期待

本学と学員のネットワークで「スポーツにも強い中大」培う

7月27日（現地時間、以下同）開会が目前に迫った「2012年ロンドン五輪」。中央大学からは、学生の石橋（競泳4×200mリレー）、館野（陸上400mハードル）、飯塚（陸上200m、4×100mリレー）の3選手、学員の千田（フェンシング男子フルーレ）、山本（マラソン）両選手、計5選手が出場します。開催地ロンドンには、本学の前身「英吉利法律学校」ゆかりの「ミドルテンブル」があり、その沿道もマラソンの舞台となります。本学選手の健闘を祈念しつつ、オリンピックと大学、その中にあっての「スポーツにも強い中大」を目指す本学とこれまでの活躍を振り返ってみました。

## マラソン、ミドルテンブル 沿道を疾走

本学水泳部は大学チーム“日本一”と目される名門。競泳4×200mリレーの石橋千彰選手（総合政策3）は、7月31日にまず予選に登場します。革新的なチームビルディング論や指導法を導入し、「自ら望み、工夫し、努力する泳ぎ」を追求してきた本学水泳部は、ロンドン五輪でも、その真価を見せてくれるはずです。

また、陸上400mハードルの館野哲也選手（商3）は、大学2年時に日本インカレ3位、3年時に関東インカレ2位の実績を持ち、8月3日の予選に臨みます。

飯塚翔太選手（法3）は大学1年時に世界ジュニア選手権200mで優勝（日本人初）、大学2年時には日本インカレ200mで優勝の実績を持ち、7日にまず200m予選、10日に4×100mリレー予選に出場します。陸上への現役学生の出場はなんと、1964年東京五輪以来48年ぶりの快挙となります。

一方、学員ではフェンシングの千田健太選手（2009文卒）が2008年北京五輪に続いて登場。まず7月31日に男子フルーレ、8月5日に男子フルーレ団体戦に臨みます。また、男子マラソンの山本亮選手（2007法卒）は、最



マラソン（8月12日現地時間）に出場する山本亮選手

終日となる12日に登場し、狭い道、きついカーブ、アップダウン、それに石畳もあるロンドン中心部を疾走します。箱根駅伝3度出場の彼は、変化に富んだコースが得意。「中大卒として御縁を感じるロンドン、しかも本学とゆかりのあるミドルテンブルの前を走れることは光栄なこと」と話していた山本選手（5月21日「学員時報」取材）。力強い走りを見せてくれるはずだ。

## 「金メダル獲得数世界トップ3」 に向けて

日本オリンピック委員会（JOC）は、スポーツの最高の祭典である五輪・国際競技会の役割をこうアピールしています。「スポーツは、健康・体力の保持増進に加え、体を動かすことによる充足感、爽快感、達成感、満足感、連帯感などの精神的充足をもたらし、明るく豊かで活力に満ちた社会の形成に寄



フェンシング男子フルーレ（7月31日・8月5日）に出場する千田健太選手



競泳4×200mリレー（7月31日）に出場する石橋千彰選手

与する。また、人間の可能性の極限を追求する世界共通の文化的行為としても考えられ、国家、民族を超えた相互理解を促進する。特に、オリンピックや国際競技会で展開されるトップアスリートの活躍は、見る人々に大きな感動や楽しみ、活力を与える」（2009年12月。委員会ホームページより）。

JOCは2001年4月に「JOCゴールドプラン」、続いて2004年アテネ五輪の成果を踏まえて「JOCゴールドプランステージII」を掲げ、「金メダル獲得数世界トップ3」という大目標にトライしています。さらに、2008年には半世紀に及ぶ悲願でもあった「ナショナルトレーニングセンター」もでき、「チームジャパン」の総合力を生かす新たな取り組みがはじまっています。

目標達成には、こうした弛まぬトップアスリートづくりの一方で、法律や制度、限られた財源など、スポーツ界の努力だけでは解決できない課題も多く、政府、地方自治体、企業、大学などとも連携した“国を挙げた取り組み”が必要となっています。

### オリンピックと大学、そして企業

日本の大学がトップアスリートづくりに努めてきた背景には、こうした言わば“社会的な要請”の前に、まず我が国固有のスポーツ事情があります。欧州では、スポーツは地域クラブを中心に発展してきました。これに対し、日本では学校の運動部を中心に発展してきており、大学もその延長線上にあったからです。

トップアスリートの頂点、五輪における学生選手の割合を見ると、日本が初参加した1912年ストックホルム五輪には三島弥彦、金栗四三選手が出場しましたが、両選手とも学生でした。その後、1936年ベルリン五輪までは6～7割を学生が占め、ヒトラー自身によるナチスの鼓舞を企図したベルリン五輪には日本から179選手が参加し、うち62.0%の111選手が学生であったということです（中澤篤史著『オリンピック日本代表選手団における学生選手に関する資料検討』）。

しかし、第二次世界大戦後は次第に出場学生が減少しはじめ、1964年東京

五輪では357選手中、35.9%にあたる128選手が学生でした（同）が、現在では20%台で推移しています。

大学がトップアスリートを輩出することは、厳しい学校間競争の下で知名度、好感度を上昇させ、より多くの学生を集める効果が期待できます。こうした広報効果に着眼し、近年は企業でもトップアスリートを受け入れ、育成に乗り出すケースが増えています。このような動きの強まりは、大学との協調、競争の両面を生んでおり、学生の割合の減少はこうした事情が大きく反映しているようです。

### 中央大学の「オリンピック小史」

さて、こうした中でわが中央大学はどのように取り組んできたのでしょうか。スポーツ関連でまず登場するのは、1918年の「各校対抗第1回庭球大会を本学コートで開催」。その翌1919年には、早くも現在の興隆につながる「水泳倶楽部を組織」。そして、1921年には今日の伝統につながる箱根駅伝（第2回）に初出場し、総合7位という成績を収めています。





陸上 200m (8月7日)、4 × 100mリレー (8月10日) に出場する飯塚翔太選手



400m ハードル (8月3日) に出場する館野哲也選手

五輪関係（主としてメダル獲得者、監督・コーチは略）を特記すると、1924年パリ五輪に本学初の田代菊之助選手がマラソンに出場。1936年ベルリン五輪では、村社講平選手が5000mと10000mで決勝4位に入りました。続いて、1952年ヘルシンキ五輪では石井庄八選手がレスリング（バンタム級）で、本学初、日本としても戦後初の金メダリストとなり、復興途上のわが国、国民を励ましました。

1956年メルボルン五輪ではさらに、レスリングで笹原正三選手（フェザー級）と池田三男選手（ウェルター級）が金を獲得し、中大レスリング部の全盛期をつくりました。池田選手は現役（経4）初のメダル獲得という快挙。

名門水泳は、1960年ローマ大会で開花。藤本達夫選手が800m自由形リレーで銀（世界新）、開田幸一選手がメドレーリレー（バタフライ）で銅を手にしました。また、ボクシングでも田辺清選手が銅（フライ級）に輝きました。

わが国が金16、銀5、銅8という29のメダルラッシュに沸いた1964年東京五輪は、本学からは選手、コーチ

合わせて44名が参加しました。レスリングの渡辺長武選手（フェザー級）、柔道の岡野功選手（中量級）、ボクシングの桜井孝雄選手（バンタム級）がそれぞれ金。大きな感動を生んだマラソンの円谷幸吉選手と、バレーボールの森山輝久選手が銅を手にしました。

このあと、1968年メキシコ五輪で、レスリングの中田茂男選手が金（フライ級）、本学5選手が入っている男子バレーボールが銀、同じく5選手が入っているサッカーが銅、1972年ミュンヘン五輪では柔道の関根忍選手が金（中量級）、3選手が入っている男子バレーボールがともに金。さらに、1976年モントリオール五輪、1980年モスクワ五輪（日本不参加）のあと、1984年ロサンゼルス五輪では重量挙げの真鍋和人選手が銅（52kg級）、1988年ソウル五輪では野球で笹篠賢治選手が銀（外野手）、1996年アトランタ五輪でも野球で佐藤友昭選手が銀（同）、と続きます。

2000年シドニー五輪は、中村真衣選手が100m背泳ぎで銀を獲得。中村、田中雅美、源純夏の現役3選手が400mメドレーリレーで銅に輝き、再び“水

泳日本、中大”を世界に知らしめました。

### 手厚いサポートがあってこそ 誕生するトップアスリート

本学学生・学員の、五輪でのこうした輝かしい活躍は、底辺の広い三角錐の頂点で花開いた快挙です。選手は好不調に悩みつつ、「どん底から這い上がってこそメダルに手が届く」（中村選手、平成24年5月11日学会会全国支部長会議「講演」より）と力を振り絞ります。そして、選手層、監督、コーチ、それらを支える大学、学員の手厚いサポートがあってこそ、それが実現します。学会会では、2012年3月で第58回を数える学員体育会表彰式などにより、大学と一体になった支援を続けてきています。2012年ロンドン五輪では、そうした「スポーツにも強い中大」に思いをめぐらせつつ、5選手に声援を送りたいものです。

本稿は6月15日の情報で記載しました。  
写真提供：山本選手／毎日新聞社  
千田選手／Enrico Calderoni／アフロスポーツ  
石橋選手・飯塚選手・館野選手／中大スポーツ